北越雪譜　初編　下之巻

農商務省圖書
十二三六五號
共　冊

太政官文庫
和書　門
一一一六〇號
七冊

内閣文庫
和書
一一一六〇號
二七五函
五架　七冊

内閣文庫
番號　和　11160
冊數　7（3）
函號　175　80

国立公文書館
National Archives of Japan

北越雪譜初編巻之下

目録

渋海川さかべつたう　順上下につく

鮭の食用

鮭を捕る打切并ウライ

漁夫の溺死

鮭漁の類術

人家の垂氷

滝の氷柱

寒行の威徳

薛山村の毛塚

泊り山の大猫

鮭の字考

鮭を出す所并鮭の始終

撈網

千曲川の総滝

鮭の洲走り

笈掛岩の氷柱

雪中の寒行

雪中の幽霊

雪中鹿を追ふ

山言語

明治九年購求

童の雪遊び
通計二十三條
雪に座頭を降す

越後奇跡録 五巻 近刻
鈴木牧之編撰 京山人百樹刪定
此書は越後七不思議の細説并に図名所旧跡の古跡并図國中温泉の図并に主治山川勝景の図説近古人物名誉孫傳授の餘種々の奇談其地を踏ずして其事を見るがごとくに記したる仮字文の書なり
京水百鶴画図
予此氏の葉の餘地在り空しう述べからざるを以て右の書名を標して大方の諸君に報じ刻に先んずるの好評を祈る
書肆 文溪堂 謹識

北越雪譜初編 巻之下

越後塩沢 鈴木牧之 編撰
江戸 京山人百樹 刪定

○渋海川さかべつとう

我国の俚言に蝶をべつとうといふ渋海川のほとりにてはさかべつとうといふ蝶は諸の虫の羽化する所にて大なるを蝶といひ小なるを蛾といふ本艸其種類はなはだ多し草花も蝶に化する事本草にも見えたり蝶の和訓をかはひらこといふは新撰字鏡にも見えて古言なりさかべつとうといふ名義は未考ずさて前にいへる渋海川にて春の彼岸の頃幾百万の白蝶水面より二三尺をはなれて羽もうごかさずむらがりて群をなし高さは一丈あまり両岸を限りとして川下より川上の方へ飛行その形状花のふきとぶんはいろいろに幾里ともなく流れに霞をひきたるがごとく朝より夕べまで悉く川上へつゞきたるがそのかぎりをしらず川水も見えざるほどにて日も暮んとするに

いとおびたゞしく水面におちいりて流れてそのさま白布をさらすがごとし其蝶の形燈蛾のごとくにて白蝶也我国に大小の川〻幾流もあるなかに此浩海川にのミかぎりて毎年しかりしが此事あるも奇とすべしなるに天明の洪水以来此事絶てなし

○本草を按るに石蠶一名を沙虱といふもの山川の石上に附て繭をなし春夏羽化して小蛾となり水上に飛ぶといへり件のしらべつてうハ浩海川の石蠶なるべし其種を洪水に流し尽しなるゆゑなるべし他国にも石蠶を生ずる川あらバ此蝶あらんもしるべからず余此蝶をいぶかりしゆゑ近隣の老婦若きころ浩海川の辺りより嫁せし人ありしゆゑ再び問ひしにその老婦の語りしまゝをこゝに記せり

○鮏の字の考

新撰字鏡といふ字書ハ本朝の僧昌住といひし人今より九百四十年あまりのむかし寛平昌泰の年間作りたる文字の吟味をなしたる書なりしより世の学匠たち傳へ写して重宝せしきさきなりしを近き頃村田春海大人右の書を京都にて購得てのち享和三年の春創て板本となして世の重宝となりてより後の学者の机上に置ハ實に春海大人の賜なりけり右の字鏡ありて后二十余年を歴て源の順朝臣の作りたる和名類聚抄ありき是も字書也元和の年間那波道円先生創て板本とせられしより（後の板もあり）さて和名抄ありて后五百年ちかくをへて文安年中下学集といふ字書ありきこれも元和三年創て板本となりしより下学集より五十三年の后明應五年林宗二（堺の町人）節用集を作り文亀のころの活字本ありしよしいろは引節用集の権輿也其后百八十年を歴て元禄十一年に槙嶋昭武駒谷山人が作りたる（江戸の人）書言字考一名合類節用集といふ板本あり宗二が節用集を大成したる物にていろは引之（平他字類抄のなる下に引用せざるものハあつくにあげず）本朝の字書のなる大抵ハ件のごとしされバ今俗用する節用集ハ新撰字鏡和名抄を先祖の父母として后のハ皆其子孫也是ハ鮭の字の事を言んとて童蒙の為に先いふなりけり○新撰字鏡魚の部に鮏（佐介）

とあり和名抄にハ本字ハ鮏俗に鮭の字を用ふるハ非なりといへりされバ鮭の字を用ひしも古し同書に崔禹錫が食経を引て「鮏其子苺に似て赤く光り春生まれて年の内に死ぬ故にまた年魚と名く」とみえたり新撰字鏡に鮭の字を出しハ鮏と鮭と字の相似たるを以て伝写の誤りを伝へしもあるべからず鮭ハ河豚の事なるをや下学集にも鮭干鮭と並べ出せり宗二が文亀本の節用集にも塩引干鮭とならべいだせりと見ゆるも鮏と鮭と伝写のあやまりなるや駒谷山人が書言字考にハ◯鱖◯石桂魚◯水豚◯鮭と出して注に和名抄を引て本字ハ鮏といへり大典和尚の学語編にハ鱖の字を出されたり鱖をあさまげト訓じ唐の字書にハ鱖ハ大口細鱗とあれバ鮏にあはせるなるらん字彙にハ鮏ハ鯹の本字にして臭臭といふ字となりといへり按ずるに鮏の鮮鱗ハことさらに臭臭きものなるにやあらん鮭ハ鯸鮐の一名ともいへバ鮭にハいよいよ遠しとすれバかくすれバ鮏の字を知りて俗用にハ鮭の字を用ふべし件の如く

鮏の字も古く用ひたれバいかにもこの和文章にも鮭の字を用ふべし鮏の字ハ音くハ通じ難しこゝにハ姑く鮏に従ふ

◯鮭の食用

腥にて喰するハ◯臭軒◯鱠◯鮓之◯烹る◯炙その料理によりて猶あるべし醃にするを塩引また干鮭といひしも古き事まへに引る書にみえたるごとし延喜式にのせたる内子鮏ハ今いふ子篭り鮏の事なるべし又同書に脊腸をさるこゝト訓り丹後信濃越中越後より貢とする事もみえたれバ古代ハ鮏を供御にも奉りしなるべし都へ遠きよりおくりたれバ塩引なるらん頭骨の澄徹ところを氷頭とて鱠に作し子を鮞といひてこれを醃にするも美味之子あるまゝを塩引にするを子篭りといへり古へのまゝハよりトいひしも是なるらん本草に鮭味甘く微温毒なし主治中を温め気を壮にすを多く喰へバ痰を發すといへり我国にて塩引にするを大晦日の

節には用ひざる家なし又病人にも喰せ他国にて腫物にいむにハまさるなきなど
るもまにやあらん

○鮭を出す所

鮭ハ今五畿内西国にハ出ざる所を聞ず東北の大河の海に通ずるにハ鮭あり松前蝦夷地最多し塩引として諸国へ通商ハ此地に限る次にハ我が越後に多し又信濃越中出羽陸奥之常陸にもありときこえたれどもその所の食にあつるに足るのミ通商するにいたらず江戸ハ利根川にありといへども稀なるゆゑ初鮭ハ初鰹の價に比すとぞ我国にてハ毎年七月二十七日諏訪の祭りの次の日より鮭の漁をゆるしはじめ十二月寒のあけるを漁の終りとす古志の長岡奥沼の川口あまりゆゑ漁しる一番の初鮭を漁師長岡へ献ずるを例として鮭一頭に一頭を一尺とし米七俵の價を賜ふ免まであり（献ずるさけにハ寸尺の定めあり俵の数も下る）鮭の大なるハ三尺四五寸小なるも二尺四五寸とす猶小なるもあるべし

男魚女魚の名ありめおハ子あるゆゑをとよりハ價貴し五番まで奉りて后を賣る初鮭の貴きゆゑなりしかしてきるべしことを賣をなす江戸の初鰹奥にをきしおとゞぞ初鮭ハ光り銀のごとくにして織青をあり肉の色紅をぬりたるが如し仲冬の頃にいたれバ身に斑の錆いで肉も紅ゐ薄し味も甚劣れり此国にて川口長岡のあたりを流るゝ川にて捕りたるを上品とす味ひ他に比すれバ十倍し僅に其地を去れバ味ひ美ならずその味ひ美なるものハ北海より長江を泝りて困苦するの度にあたるゆゑならん奥急浪に困苦バ味ひなくぞ其美ものハ北海の奥の味ひ厚と南海の奥の味ひ淡の差ひあるがごとし

○鮭の始終

我国の鮭ハ初秋より北海を出て千曲川と阿加川の両大河に泝る其子を産んとて女魚に男魚随てのぼる泝る事およそ五十余里河に在

澁海川奇蝶之圖

譜巻六 文溪堂蔵

事ハおよそ五ケ月あまりにしてその間に八九十十一十二月人に捕らるゝとゝまらざるハ海へ皈る故に大
小ありて子を産つける所ハかならず心ありて一定ならざるといへども千曲と奥野の両
河の合たる川口とにかり沙に小石のまじる由ゑこまよりをおのれが産所とし流
れの絶急ならぬ清き流水の所に産んとて鮏の搶く群るを漁師のま
ことに掘につくざまにつくともいふ沙をわけてさぐのたまちをなと由ゑざまことのざまなりん女魚男魚ともに
尾をもて水中の沙を掘るその廣さ一尺あまり深さ七八寸長さ一丈あまり數日
にしてこれを作るつくりをはれバ女魚そのなかへ鮞を一粒づゝ産むらむをみて
男魚己が白鱗を彈着直に女魚男魚掘のけゝる沙石を左右より尾鰭にて
もてひらけて鮞を埋む一粒も流さゝる事をせざさて此一掘に産をはれバ又それに
並て掘りてハ産ゝさてハかり幾條もなくべかりて終にハ八九尺四方の沙中へ行幾
よく腹の子をのこらず産をはる或ハ所を替ても産とぞ沙に小礫の交りたる
所にあらざれバ産ざと漁師がいへりその所為人の智にさくいおとらざるぞ

産終るまでの困苦のゆゑに尾鰭を損ひ身痩労すまでにおよびてくだり
深淵ある所にいたれバしばらく沈み居て労を養ひもとのごとく肥太りて再び流
に泝る掘につかざる時ハ漁師もこれをとらへざるなく捕るものあれども強てハ
せぬなりと女魚さへとらざれバ男魚ハ其所をさらぞ鮏の河に泝るハ子を産んと
てなりその女魚に男魚随てのがるハ子の為に女魚を助るなりんこれとも又人の
心にてしるべきて寄なる子ハ河の廣き場をえらみ鮞を産おきてる所洪水など
にて瀬かはりて河原となりしが幾とせへちても産る子腐らずふたゝび瀬となれバ
その子生化して鮏となる一年我が住む所の在なる奥野川のほとりに住む人
井を掘しに鮞の腥なるをわりいでしなりしと友人がかたりし鮞の生化まで
を漁師のことばにまやけるとも言ひ早化。身ヨ化る 鮞水にある事十四
五日にして魚となる形ち糸の如く二寸腹裂て腸をあらはす由ゑに佐ゐの名
ありとのひ傳ふ春にいたれバ長じて三寸あまりになることをくらるゝぞ捕らぬ事

ともに此子鮭雪消の水に随ひて海に入る海に入りてのち裂たる腹合して腸をなすと漁父がいへり前にもいへる如く鮭の漁は寒中を限りとす寒あけて捕れば崇をなすとていひつたふ我が若かりし時水村の一農夫寒あけて后瀬のほとりにて鮭を奪ひてこれを喰ひ熱にかゝり三日にして死たる事ありきまでたりけるいふ口碑の説も誣べからず又ふるきが産はおきてをしらごとをとまでその家断絶せしといひ伝へたり鮭の大なるは三尺四五寸にあまるもあり是は年々綱を脱れて長じたるなりとぞ我が若年のころは鮭あまたとれたる故その價もいやしかりしが近年は捕る事少きゆゑ價も次第に倍せり年々工を新にして漁する故捕減したるならん女魚の大なる腹の鮞一升もあり小なるは三四合にすぎず江戸に多くおくるは塩引と唱るは鰺鮭とて越後の鮭とは一品別種なる物なりと或物産家のいへり河に生まれて海に成長すといへどもむかしより海中に入る事なし其始終をおもふに鮭は鱗族の奇異といふべし

牧之常におもへらく寒気の頃捕たる鮞と男魚の白鱁とをまじへ鮭居る川の沙石に包て瓶やうのものにうつし入て鮭なき国の海に通ずる山川の清流にかの瓶にうつしたるものを沙石のまゝさけのうみつける如くにおきしおかば此川にかく鮭いでくとも三年捕る事を国禁あらば鮭を生ぜんもしるべからず生ぜば国益ともなるべし（江戸の白魚はむかしそのこをうつしおひしとぞきこえつる／なりしもあまたなべし）

○打切り並にて

北海新潟の海門におつる大河を阿加川と千曲川とす（阿加川の事はこゝにはぶく千曲川一名を信濃川といふ隈の字をも用ふ）千曲川の水源は信濃越後飛騨の太小の川々あつまりて流を併て此大河をなせり越後は妻有上田の二庄をながれて奥野川の急流をなし魚沼郡藪上の庄川口驛の端にいたりて信濃を流る川と合して古志郡蒲原郡の

中央をつらぬきて海に入る信濃の流は濁り越後は清し信水は犀川の濁水
あるゆゑ也鮭初秋より海を出て此流に泝る蒲原郡の流は底深く河広ゆゑ
大網を用ひて鮭を捕るかの川口駅より上上田妻有のあたりにては打切といふ
事をなして鮭を捕るその仕方は夏の末より事をはじめて岸根より川中へ
丸木の杭を建つらね横木をそえてまがきに透間なく竹簀をもつて墻のごとくに
なし川の石をよせかけて力となせ長さは百間二百間にいたる周囲形は川の便利
にまかせ船の通路はこれを除きて障りをなさず又通船の路印を建て夜の
為とすさてこれにつゞといふ物を簀下へならべ鮭の入るべきやうにしおく〈之をひとりそつゞ〉
のあなをもくゝしおく此つゞの作りやうは竹を簀にあみて末をば縛し鮭の入るべき口の方は
竹の尖を作りかけて腮をなし地につく方はひらめ上は丸くし胴中は彭張あり
長さは五尺ばかり是鮭入らんとすれば口広がるやうにいかにも功に作りたるものゆゑ
これをつゞといふべきを濁り訛たるなるべし田舎言語には古言のまゝを

いひつたへてむかしをしのぶもあれども言の清濁をとりちがへて物の名などおかく
きこゆるも多し〈阿加川を所にてはあが川といふ〉さて此打切を作るは幾ばくの費ある事ゆゑ漁師
ども語らひあひてするなり之打切ある岸には仮に小屋をつくりて漁師ども
昼夜こゝにありて夜も寝ずして鮭のかゝるを待つ七月より此業をなしそめ
て十二月寒明まで一連のものかゝる此小屋にありて鮭をとる此打切は川口を
一番として水上へ十五番まであり是はいづくの持とて川にその境目ありて
それぞれ厳重也○さて鮭は川下より流に泝りて打切にいたり船のかよふべき
所は流を打切にせきとめて小滝をなすゆゑ滝にのぼるをいとふにや大かたは打切の
よどみにいたりかの垣にせまり潜るべき所やあるとてかしこをさぐる際つゞを仕
かけたる所にいたりくゞりいでんとしてこゝに入れば底あるゆゑいでんとするに口に尖
りの腮ありて出る事あたはず○さて小屋にあるものはかゝりつらんとおもふをりふし
をはかりまるきぶねといふ舟をのりいだし〈大木を二ツにわりてこれをくりぬきて舟に作りたるもの也〉○瀬の浅き所へは舟を用ひず

雪下る寒夜にも銭の為にそのさむさをもいとはず赤裸になりて水に飛入り
つかみたる鮭あればつかみのまゝ舟に入またさけをいだす大鮭は三尺あまりあるを
あらものゝ鮫狂ふゆゑ魚撲といふものにて頭を一打うてば立地死たるに寄る
ゆゑ此魚撲といふもの馬の爪をきりたる撲にあらざれバ死せず私につくり
たるつちにてハいかほど打ても外ぞ又うまく頭に打べき所もありと漁夫がいへり

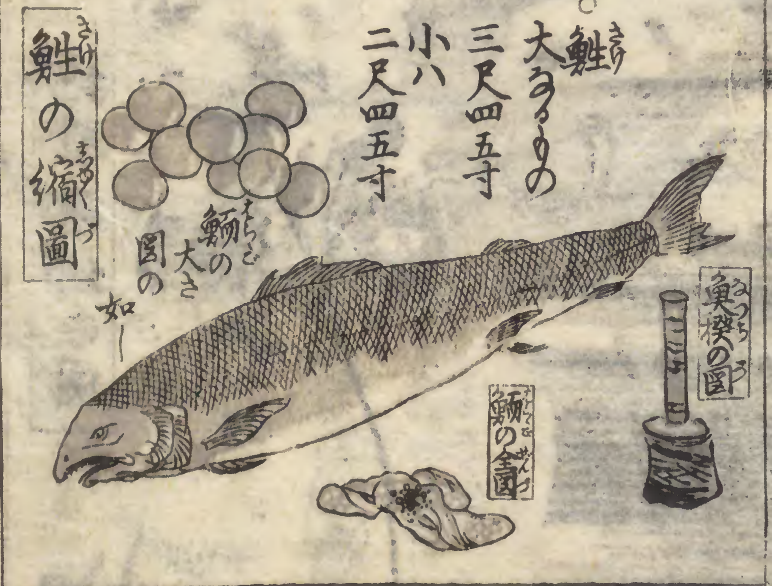
鮭ある所にてハいづくにても此つちを用ふるゆゑ馬の爪きるつちとぞ

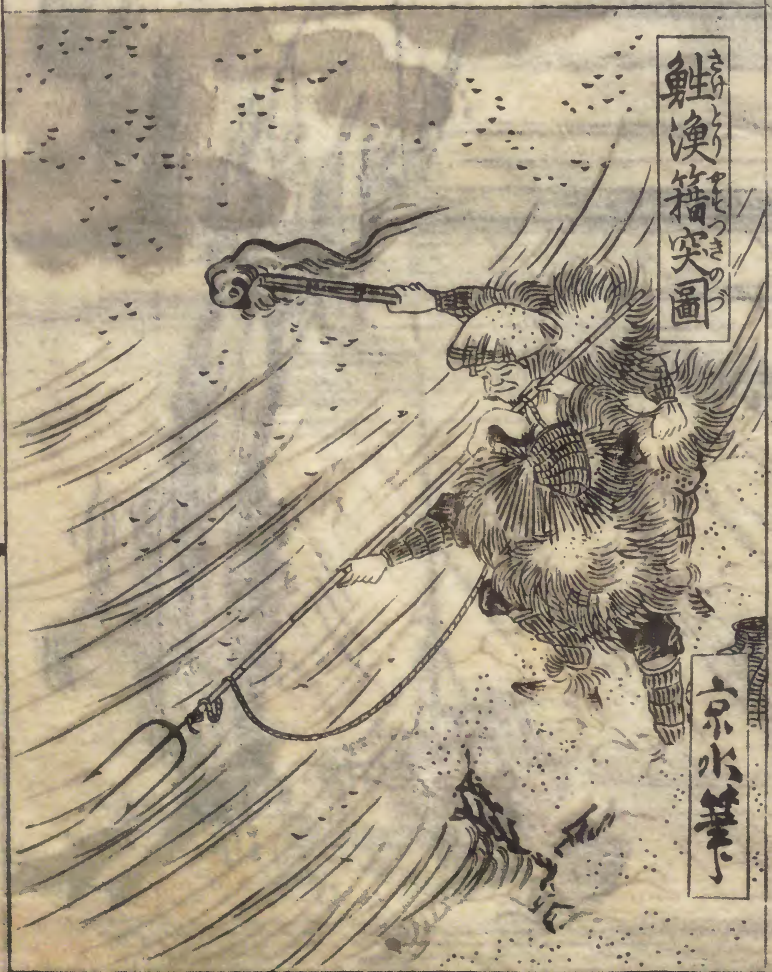
きけど助買などよべとて鮭の仲買するもの此小屋に
きたりてさけをかひてうる也

○撈網

かきあみとよぶハ撈網なり鮭を撈ひ捕るをいふその撈ひ網の作りやうハ又ある木
の枝を曲げあはせて飯攫なりに作りてまた網の袋をつけ長き柄ありてそれを
ふちなりとぞ岸の阻たる所ハ鮭岸につきてのぼるものゆゑ岸に身を置むか
りの架をかまへてこれに居て腰に魚撲をさし鮭を撈探りてすくひとるなり

岸の絶壁なる所ハ木の根に藤縄をくゝりつけ架を釣りてこれに居て撈網
をつかふも稀にあり幾尋ともしれぬ深淵の上にこの架をつりて身を置一條
の縄に命をつなぎてかくその業をなせば怖しともおろかなるハ此事になるべき
しるゆゑなるべし





文渓堂蔵

絶壁擡綱の圖

鮏漁打切の圖
牧之画図

鮏洲を走る圖
京水筆

○漁夫の溺死

或村に不祥の事ありつまびらかにいはゞ夫婦して母一人をやしなひ五ッと三ッになる男女の子を持たる農人ありけり年毎に鮏の時にいたれバその漁をなして生業の助となせり此所ハすべて岸阻なる所なれバ村のものおの〳〵岸におのが架を作りて撈網をなせるに絶壁の所ハ架を作るものもなけれバ鮏もよくあつまる所なるをかの男こゝに架をつりおろし一すぢの縄を命の綱として鮏をとりけりさて十月の頃にいたり雪降る日などハ鮏も多く獲易きものなる一日降る雪をも厭ず蓑笠に身をかため朝より架にありてさけをとり番にとりあがる時ハ番中も縄をつけおけるをかのをとこまづ架を釣る綱に縋りて絶壁を登りさてふぢを引あぐるにもどりて登り下りするもことに慣てハ猿のごとし物喰ふ時ものぼるに此日も暮て雪荒になりければ雪荒ゆゑなるべし鮏えやせきがとてふたゝびかの架にゆかんといふを雪荒なれバとて母も妻もとゞめけるをきかず炬を用意して架にありてかゝるときをせしにそこにてさけあまたとえしよし鵜飼の謡曲にいふごとく罪も報も後の世も忘れはてゝおもしろく時をぞうつしける○かくてその妻ハ母も臥し子ども寝かしけれバこの雪あれに夫ハさこそ凍え玉ふらめ行むかへてつれ皈らんと蓑にその帽子をかぶり松明をてらし手に二本を用意して腰にさしかしこにいたり松明をあげてさしのぞき遥下にある夫にこゑかけいふにさむからん初夜もいつかすぎつらんはやくやめて皈り玉へ飯もあたゝかにして酒もかんしめ置たりいざかへり玉へといひまつもあるべし揺も入るやうにありしぞそれも持来たりといふも西おとしの雪荒にてよくもきこえバ摘をあげていへバ夫あまたをきてつけよろこべよ鮏ハあまたとりたるぞあとハうちよりてうまき酒をのむべし今すこし捕てくるんぞちハさきへ皈れといふにさらバ松明ハこゝにおかんとて燈したるまゝ架をつりとめて綱をくゝしたる樹のまたにさしおきて別の松明に火をうつして立かへりぬこれぞ夫婦が一世の別れなりける○さるほどに妻ハ家に

かへり炉に火を焼きてあたゝかなるものくハせんとさわぐしにしばらく待居たりし
に時うつれども皈りきたらざりければびくぶくろの所にいたりしにのき
さしたるたいまつもきえぞ持たるたいまつをかざして下を見るにひかりもよくハ
とゞかで夫のなげごゑさへきこえず声のかぎりよべどもこたへずさてハ架よりをちたる
にやさるにてもいぶかしと心をとゞめて松明をふりてらし登りし跡の雪を
あらためてみれバさいぜん木のまたにさしはさみおきたる炬のきえおちて
ありけるに心つきて持たるたいまつにて猶よく〳〵みれバ架をつなぎし命
のつる焼残りてありけるを見るよりむねせまりたいまつにてやけおちて綱を
きりて架ハおちたる夫ハ深淵に沈めるならんたとひいかに游をしりたりとも闇
夜の早瀬にハおちたく手足凍え助り玉ふべき便ハあらじこハいかにせんと姑に
いひきけるに泪を雫にふらせ哭けるが我もともにと松明を川へ投入身
を投んとしけるが又ハおもへらくわがなきあとハ老たる母と稚き子どもら哉
養ふものなく手をひきたく路上に立玉ふらん死ぬるにも死なれざる身にハ成たる
かなかりし玉へつまと雪にひれふしなげけるつるにすがりつきてこれをあげて
哭になきたりかくてもあるべきならねバなく〳〵焼残りたる綱をきりしにをりしも暗き夜
にたいまつもなく雪荒に吹きされ泪もこほるばかりなく〳〵立かへりしが夫が
死骸さへみえざりしと其所に近き辺りの友人が此頃の事とてさま〴〵のはなし物
がたりせり

○ 総滝

総滝とハ新潟の湊より四十余里の川上千隈川のほとり割野村にちかき所
の流にあり信濃の丹波島より新潟までを流るゝ間に流の滝をなすハこゝのみ
なりその総滝とハ川をなかばおよそ百間ちかくもあるべきほどに大なる岩石竜の臥
たるごとく水中にあるゆゑ水これに激して滝をなすと雖是に
いたりて激浪にのがりかねて猶豫なく漁師ども假に柴橋を架わたし岸ある

ちかき岩の上の雪をほりすてこゝに居てかの撚綱をおろさせさまで命の惜きにや
おの〳〵己が腰に縄をつけこれを岩の尖りなどに縛しかくてこゝに往来する
所ハ岩に足のかゝるべき所をまづ〳〵に作り岩にとりつきて登り下りをなす若
一あしを過つ時ハ身を粉に砕きて滝におちいるなりその危きこといはん方なし
余前年江戸に在し時右の事を先の山東翁にかたりしに翁曰世路の灘
ハ愁滝よりも危からん世ハ足もとを見て渡るべきにやとて笑つて格言なりと
耳にとゞまりしが今偶然おもひいだしてこゝに記せり

○鮭漁の類術

○當川 三角なる網にてとるをいふ ○追ひ川 水中に杭をたてあみをはりさけを水をうちてさけをおひこむ ○四ツ手網 他国におなじ
○金鍵 水中のさけをかぎにかけてとる そのしかけきはめて奇く妙なり ○流し網 網をさしおとしてもいふあとの長さ二百けんあまりなりかんだるにとりつけてながるゝなり
○簎突 水中のさけをみてやすにてつきとる一ツものゝなし その手ぎはまことにおもしろき妙なり ○このほかあまたあり
といへども詳に解んハ駁雑けれバその網をもらせり

○鮭の洲走り

さけのすばしりとハ雪前に河原などにあるをいふかれおそふにせめらるゝ人にも追
はるゝときハ水を飛離れて河原にのぼり網ある所をこえて水にとび入りて
あみを退るゝ此時ハ大鮭さきにたちて水をきるゝあたりよりぬけたる小鮭など
右に随ひそのかぎり河原をわしる事四五間におよぶさまでも箭のごとくにして人
の足もおよびがたしさるさきにすゝむ大鮭ハ物にさへりて横に倒るゝ時ハあとなる
したがひたる鮭もおなじくうちかさなりてあそびハかさなど人の捕るを俟がごとくなるぞ
して手も濡さず二三頭のさけをうることありかれ足無して地をはしり倒まで
あそび起ざるなど魚族中比ふべきもののなきハ奇異といふべし

○垂氷

前年牧之江戸に旅宿の頃文墨の諸名家に謁して書画をこひし時前の
山東庵にハ交情厚くなりて度々訪ひしに京山翁当時ハいまだ若年な

りしがある時雪の詰につけて京山翁といへる今年正月友人らと梅見にゆきし
くるわの青楼にのぼりその暁雨ふりいだしがほどなくはれけるゆゑ青楼を出て
日本堤にきたりしに堤の下に柳二三株ありその柳にかゝりたる雨垂氷と
なりて一二寸づゝ枝毎にひしとさがりたるが青柳の糸に白玉をつらぬきたる如くお
きに旭のかゞやきたるはえもいはれざる好景なりしゆゑ堤の茶店にしばしやすらひ
ひさくみながらつく〴〵詩を作りし事ありきこれは餘寒の暁に雨のこぼりたるを
たる気運の機工を得てかゝる奇景をみせたるなりとぞ珍しがりてかたりし暖地
ゆゑはめづらしくもおもふべけれど我国の垂氷に比ぶれば氷柱の一屁とも思ふべし
といひしもありき○そもそも我国の垂氷をいはんに他は姑く舎きまづ我が
家の氷柱をいはん表間口九間の屋根の簷に初春の頃の氷柱幾條もなら
びさがりたるその長短はひとしからざれども長きは六七尺もさがりたるが根の太さは
二尺めぐりにひとしきもあり水晶をもて簾子をつくりたるがごとくされど我国

の人は稚きより目なれてめづらしからねば垂氷を吟咏に入るものなし
右のつらゝ明りにさはりとて朝毎に木鋤にて打おとす又家峯の谷にな
りたる所を俚言にどぶといふどぶのつらゝは春解るや積の雪のしづくをあつめて注
ぐゆゑつらゝは簷よりも大きく下にさがりたる所は二丈もさがる事あり次第にふ
とりて大になるも物にさはらぬ所はそのまゝにおくをいつか打砕く時は大力の男杭
などにて打てばくだくるを見おちてくだけたる四五尺なるを童らが打よりて
手遊の雪舟にのせて引きありき遊ぶもありて見る人は我家の氷柱にて珍らし
からぞ宮寺のつらゝは猶大なり又山中のつらゝは里地に比しがたし

○笈掛岩の垂氷

我が住む塩沢の駅三里余に清水村といふあり此村持の山に笈掛岩といふ在
高さ十丈あまり横二十五間あり下に谷川あり登り川とよぶその形ち屏風を
ひらきたるがごとし岩の頂き反り伏して川に覆ひたる下は四五十

人坐して狭からねど広く岩組あるがごとし我が上越後に八名をよぶ寄岩あ
る中にことにもその一ッは笈掛岩の氷柱とて我が国の人も目をおどろか
すなりそのつらゝおほきさ毎に下りたるかたちハ長さ六十丈ばかり太さハ二三抱
もあるべし毎たる形状ハ蠟燭のながきたるがやうなれど里地のつらゝとことなり屈
曲種々のかたちをなして水晶にて工に作りなしたるがごとく玲瓏として透徹
るが瞰の暉たるハものに比ぶべきなしと此清水村の里正阿部翁のものがたりに
てきゝぬ右のつらゝを我をさそめつらゝハめづらしからねバ強てみにゆく人なし
此清水村の阿部翁ハむかし世に聞えたる阿部右衛門の尉が子孫とぞ清水越
の関守よりこゝに長尾伊賀守の城跡あり

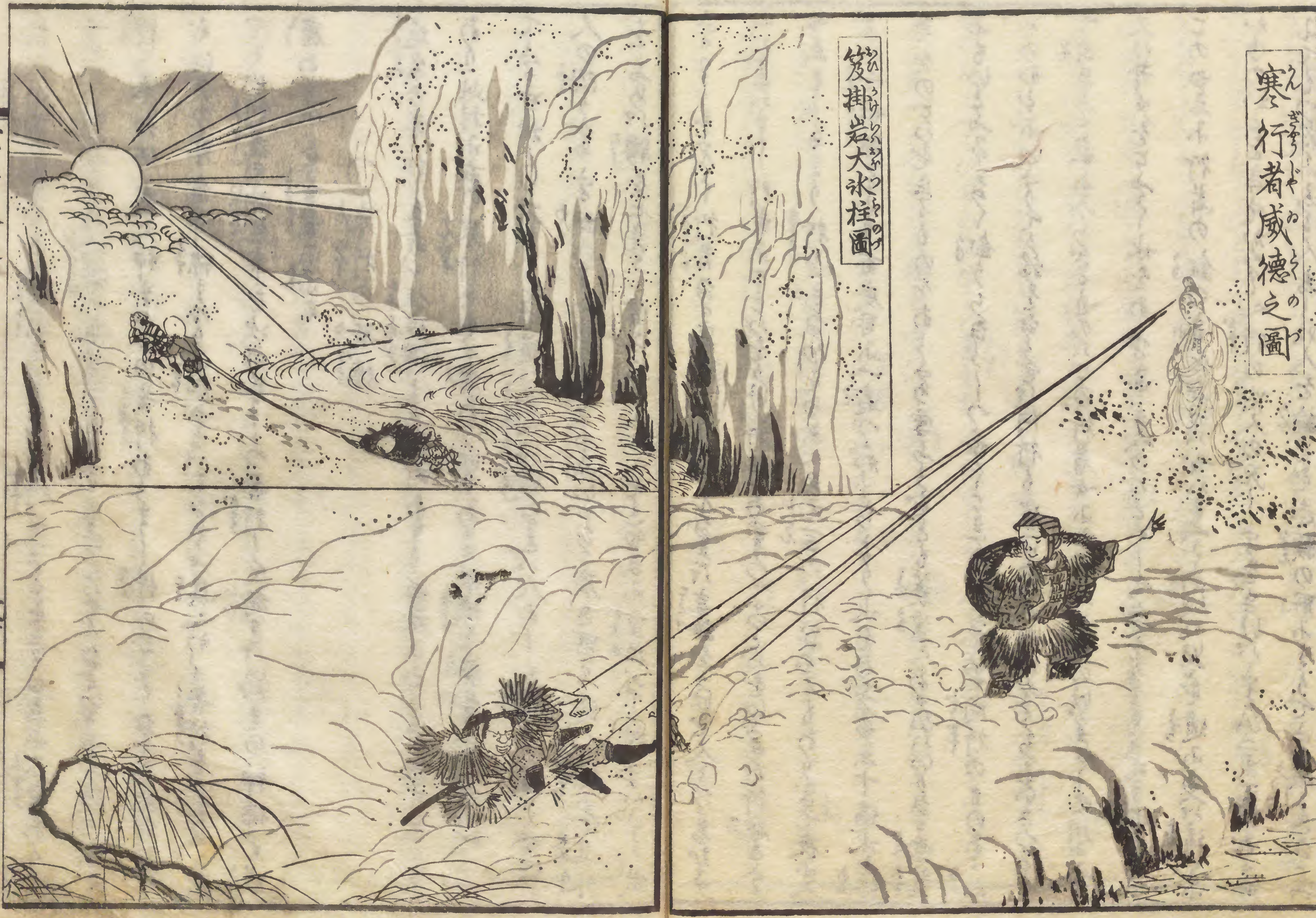
○滝の氷柱

我が上越後ハ山岳つらなりたれバ滝多し滝ある所に夏木の大樹ありて春にいたり
枝につもりし雪まづとけて葉をいださぬ木の森をなしたるに滝の氷烟枝に
潤ひしが津となりて氷柱となりて玉簾をかけ周したるやうなるハことにも又
えもいふべきものなしされバその滝にも氷となる水氷柱となりて玉簾の内に滝
をかくせしありさま四辺ハ乱瑠細玉の雪中にかの玉を出としふ崑山もかくやと
おもハるゝかゝる奇景も猟師樵夫のやうなる人稀にこれを見るのみ暖国の人にみせなバ
いかにめづらしとておもハるん牧之拘崎より妻有の庄へ山越する時目前に
みたる所也

○雪中の寒行者

我が家に江戸に二とせ居たる僕ありしがかたりしに江戸に寒念仏と
て寒行をする道心者あり寒三十日を限りて毎夜鈴が森千住にいたり刑
死の回向をなすそのさまハ股引草鞋ばかりにて着てつとむるなり又
寒中裸参りといふあり家作にかゝるすべての職人の若人らがするなり
そのさまハ常より長く作りたる挑灯に日参などの文字をかきてもちし

ところを持裸にて鐃をふりつゝとなへありく。いもひしてちかき所の神佛へまゐるもあり、まゐらんとする時ハかならず水を浴ぶ寒中の夜ハ幾人も西東へはせありくさまなり我国の寒行ハ事ハこと〳〵に似てその行ハおほいに異なり我国の寒中ハ所として雪ふらざるハなく寒気のはげしきことハ本文にいへるがごとし、その雪をふみて毎夜寒念佛又ハ寒大神まゐりとて寒中一七日或ハ三七日心に日をかぎりておのれが志を神佛へまゐらするハおほくハ農人の若人ら商家のめしつかひもありひるハ業をなして夜中にまうづる也昼のいとまをのあひ日に三度づゝ水をあぶ猶あぶるハ心にて禁じて身を拭ふ事をせずぬれたるまゝにて衣服を着坐するにハ米稿の穂の方をくゝしたるを扇のやうにひらきて尻に坐を此これハ七五三のしめのこゝろとぞかりにも常のごとくにハ居らず此のあひだ此束稿を稿ハ帯にはさみてありくなり行の中ハ无言にて一言もいはず又母のほか妻さりとも女の手より物をとらず精進潔済ハ勿論也他の人もかれが腰にはさみをたるこゝろをもつて行者なる事をしりむごんなれバ言語をかけず人とつきあたるもことさらにはなし行者にこゝろをつけ行者あやまりてさはるをいとへバ行破となるゆゑなりはじめより行をなすものゝゆゑ又无言の行ハせざるもありさて夜に入れバ千垢離をとり百度目に一遍づゝかしらより水をあぶるゆゑ十遍水を浴身をのごはずきるものをかさね雪ふらざるも蓑笠ハあるひハいとふる雪荒にもいとふ事なく鉦うちならしつゝゆくにゆくハかならず同行のもののある故そのかどにいたりて念佛をとなふれバ同行も家にありて念佛をうちあはするとして出きたる家に入らざるものハこの行者女に出会へバ身のけがれとして川に入り又ハ井戸をとりて水をあぶる事まへのごとくにして身をきよめさてまゐるなりこの夜に行者の鉦の音をきけバ女ハをそれて門へハ出ず道にあへバ遠くにかくれのひとをさけてかくるゝ行の内人の死したるをきけバたとひ二里三里ある所にてもつねにしる人もしらぬ人を諭せず志願の所にまうでたる飯るところなど其


寒行者威徳之圖
笈掛岩大氷柱圖

家にいたりねんごろに回向せしかども行の一ツとせしまゝゆゑに不幸ありて
日のうちにいまハ行者のきたるをまちかねたるものゝくやせんなどいふにも清くして
待し寒念仏寒大神まゐりの苦行なりし件のごとくなれバ他国ハしらず
ぞ江戸の寒念仏裸まゐりに比ぶれバそのみちこそ異なる苦行をなせるゆゑに
やその利益の灼然事を次にあらはしつ苦行して祈れバいづれの神仏も感
應ある事を童蒙に示せり

○寒行の威徳

近来の事なりしが我が住塩沢より十町あまり西南にあたりて田中村といふ
あり此村に右の寒行をせる者ありけりある日米俵を脊負ひて五六町へだ
てたる中村といふへゆくその道ハ三国海道なれバ人あしも繁しまゝく雪道ハ
人の踏かためたる跡のみをゆきてそれより外いかなる廣き所も道ハ一條にて其外
をふめバ腰をこえて雪にふみ入るゆゑそれゆゑに重荷など持たるハたとへ武
家なりとも一足踏退て雪のくぼき道を譲るが雪国の習ひなるにかの田中の者一人
の武士にゆきあひ重荷なれバもとより一足ふみのきたるに武士ハ声を
あらゝげ脇よれといふ今ひと足ふみのけバ重荷ゆゑころびて雪におち入らんと
おもふゆゑいかにせんとためらひしを無礼ものめと肩をつきたるゆゑ俵を脊負て
いそぎたるべき雪の中へよこさまに転び倒れしに武士も又人に投られし如く
倒れけれバ田中の者ハ早く起て后もみずしていそぎゆきけりかゝるあとへおなじ
田中の者ちかくに来り武士の雪中に倒れて起もあがらざるを不審立よりてみるに
ぞ痴平なるといへバ武士そろそろきこえしておちしなよといふその面色ハつねなら
ねど病人とも見えざればとて手を採て引起さんとするに手をのべさせ抱えか
こさんとすれどもいかさま有力のかぎりおこさんとすれども重き事大石の如く
みて身を動さこハ不思議と驚怖るをみて武士あわての事ありしが五体
をくまく動く事ならずといふ田中のもの此武士が米俵を脊負ひしものと

いひしをきゝて心におぼえあればさてハと心づきてはしりかへり行者の罰ならんと
行者なるおもしろかりしをかりきらせてはもかまびすしてる中村へ出むくもの共かの行
者をとらへつれきてすでにころびまろび玉へとてよりハ程ちかしまち玉へとてませあらそひて行者
をつよくせめけれバ武士ハ手をとりて申さしとゞめしといふ行者ハいかりたる色
もなくおもハれしにぞ衣服を脱てかの水揚にうけ赤裸になりて水を浴て寒
まゐりたる方をふしをがみ武士の手をとりて引起しけれバうちのくもなく
きあがりしふも恥かはしそ礼をのべて立さりけるとぞ常に我が家に来る
田中のものがたりなり

○雪中の幽霊

我が隣駅関といふ宿につゞきて関山といふ村あり此村より魚野川を渡る首
き橋あり流れ急なれバ僅の出水にも橋をながせバ仮に造りたる橋なれ
ど川広けれバさしもおぼつかなき雪の頃ハ此のもの橋の雪を掃く途を作れ
ども一夜の内に三尺も五尺もつもるゆゑあるとき日毎にもわづかなれバ橋幅の
狭きに雪のつもりたる上をこゆるなれバ渡り慣ざるものあやまち過て川におち入り
溺死をするものも間あり○さて此関山村のかたほとりに猫り草庵を結びて
住む源教といふ念仏の道心坊ありけり年ハ六十あまりしとか念仏三昧の
法師にて无学なれども其の行ハ頑僧にもまさりしが世を念仏ひとりなれバ年
毎に寒念仏の行をつとめ无言ハせざれども夜毎に念仏して鉦打ならし
ものにまゐりしかへさ二夜に一度ハかの橋に立て年頃あやまちて死たる者の回
向をなしけるに今夜ハ満願とてかの橋にもいたり殊更にてつとめて回向をなし
鉦うちならして念仏しけるに皎々たる月遽然に曇りて朦朧よりてうちいぶ
かしとおもひしに水中より青き火閃くとみえあがりけれバてハ亡者の陰火な
らんと目を閉てかね打ならしなほしく念仏して目をひらきしに橋の上二間を
へだて隔て年齢三十あまりとみゆる女白く青ざめたる貌に黒髪をふりみだしたるが

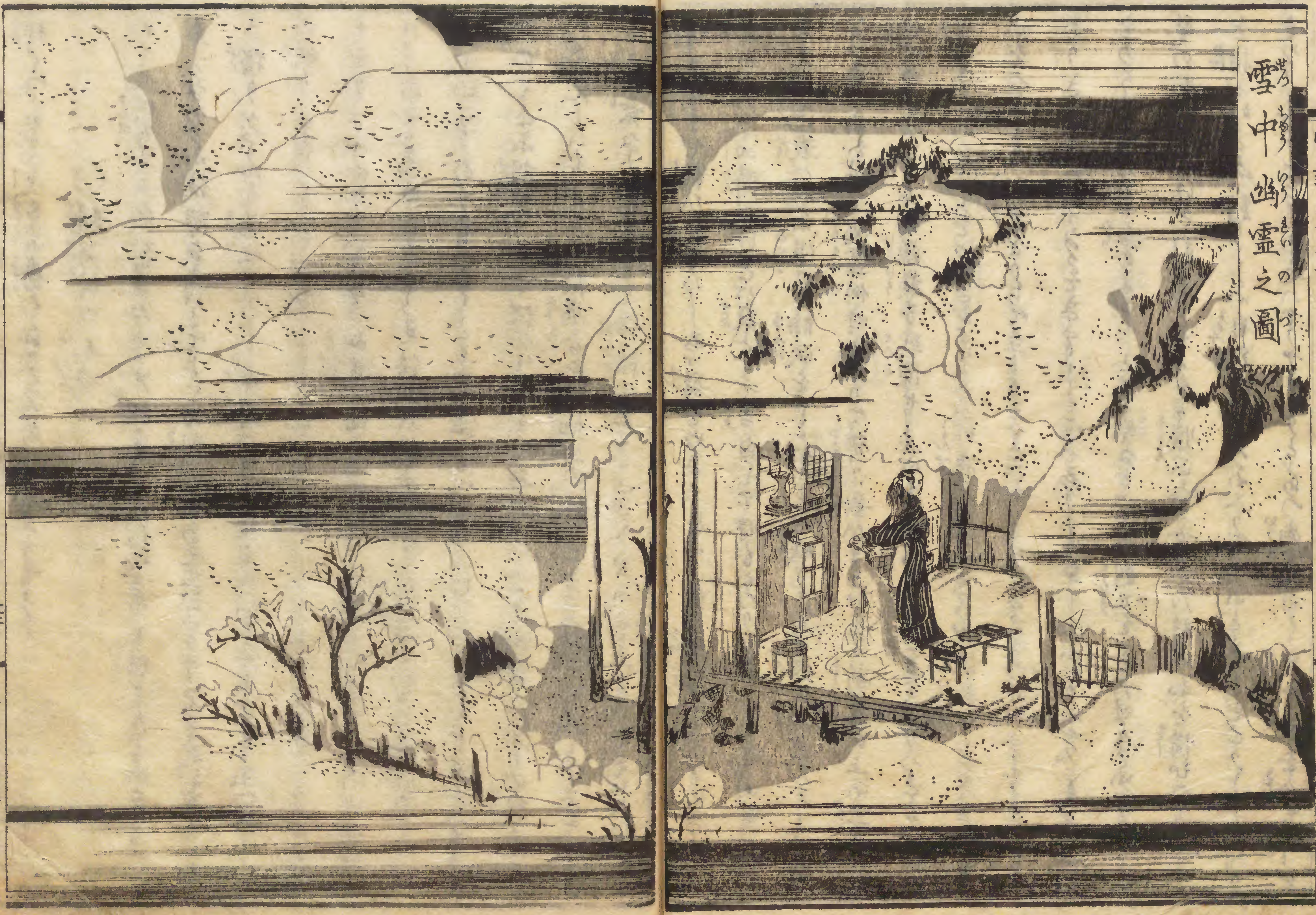
今水よりいでたりとおもはるゝばかり濡たる袖をかきあはせて立り常人ならバ吁といひ
て逃出さんにさもあるべきをその方に身を對てつくづく見るに斯闇くなりしにかゝる
ものゝありありと見ゆるも只人ならずと猶よく見れバ体ハ透徹やうにてうしろに
あるものも幽に見え腰より下ハありともなしともおぼろげにてまことに幽霊ならんと
去ればさに念仏しければ移歩よるがごとくまへにすゝみきたり細微なる声していふやう
妾ハ古志郡何村 村名ハ の菊といふものゝ夫も子も冥途にさきだちて独り跡に
のこりかなしき煙りをたてかねてはべりしよりちかごろ五十嵐村に由縁の者ある由を
助けをたのまんとこの橋をわたりかゝりあやまちて水に入り溺死なりしものなり今夜ハ四
十九日の待夜なれど世にありし時ハ誰ありて一掬の水だに手向る人
なしまさるをかん僧なくしてつひに回向ありつる功徳によりてなりも死仏果
をバえうまでども頭の黒髪が障りとなりて閻浮に迷ひあさましき此上の詫びハ
ゆ八此ちろをを剃こぼして玉ハりなん悲哉とて白に袖をおそでさめざめと

泣けり源敬ハいぶかしとおもひきゝたりしがさらバ剃こぼちたる物もなしされバ
其夜ふけても関山の庵へきたり其望をなし申さんといひけれバさも
うれしげにうなづくと見えしが烟りのごとく消うせ月ハ皎々として雲を照り
○さるほどに源敬ハありしにかへりて朝日人をおこして旧来親しき同じ村の餅
屋七兵衛をまねき昨夜かうかうの事ありしとお菊が幽霊の事をこまかに語り
お菊が亡魂今夜かならずきたるべしかゝる事ハ仏に疎き人らにもしらせまほしく
教化の便ともなるべしおのれいへども人こそしらねとおもへバ証人なけれバ人ゝ
空言とおもはん和殿ハ正直の聞えある人なれバ幽霊の証人にたのみたきこと
も人の為ともなれバ七兵衛も此法師とおなじこゝろにて志あつき念仏の信者な
れバ打うなづき御坊のことにあれバいかで固辞申さん火ともし頃に来べし
何方にもあれ隠れゐて見とゞけ申さんといへバよし仏壇の下こそよきかくれ所
なれ必人にかたりて玉ふなかれといへバ幽霊をみんとて村の若人らが来べ

文溪堂蔵

まぞ心えたるハとて立皈りぬ
○斯てその黄昏ふいたり源教ハ常より心して佛ふ供養しそこら清らふ
ゐし経を誦し居たり七兵衛もやすみたりぬ誦しをハりて七兵衛ふ物ゐどくはせ
さて日もくれけれバ佛檀の下の戸棚ふかくれをらせ覗くべき節孔もありさて
佛のともし火も家のもさぎと幽ふかし佛のまへふ新薦をしきて幽霊を延
らもる所とし入り口の戸をもそこしあけおき研ぎたる剃刀二てうを用意
し今やくと幽霊を待居たり此夜ハしかも雲ふありてそこしあけハおきたる
戸口よりもふりこむ風ふありしおもてえんともる由ゑ戸をさし炉のそこふあり
て戸棚の七兵衛ふいふやう蒲團ハしき〱きてそこふありて眠り玉ふべし、いか
できることせん幽霊をみんとおもへバ心ふ念佛もるのミ之御坊こそくせをいでゝふ称
こぎ玉ふらめ。吁。音入りし杳づかふいへ幽霊をみるともかまへて音をたて玉ふな。
とのひつ手作とて人ふもらひたる烟草のあらく刻したるも吸あきて呻ふ念

佛を嚙まぜ頷ひ撫まハし杳が鬚をぬきとく居たり雲ハ雲簾ふおかりてきらくと
音のふのミ四隣ゐけれバ寂として声なし比時もうつりけり○さて幽霊ハ影も
みえぞ源教ハ炉ふ温りて睡眠をもよほし居眠りしつ終ふ倒れんとして目を
ひらきしふお菊が幽霊何時か來りて佛ふ對ひまうけたる新薦の上ふ坐り頭を
低てぬかりきそれの源教も戦慄せしが心をしづめてよくこそきたりつれとの心ふ幽
霊ハきこしふこたへをいださずされバ昨夜みえたるふたがハず源教手をそゝぎ盥り
水をくみとり剃刀をもちて立よりつればうちとけたる髪つかのたぶさりぬきて
ありさまを雲なるうちをきたりしとのふ杳りしもかし心ふかゝりふやうまれが髪の毛
をのこしとゞめて后の杳しとせずやなご心して剃刀をとられよそりかゝるを
髪の毛糸をつけたく引がごとくなれが懐ふ入る女なれバ髪の毛を惜むなるんと毛
を指ふかくりて剃りしふ自然やところふ入りて手ふとゞまらぞさうくして剃り
をハりつゞりそこしの毛ハやうやくとりとどめつ幽霊ハ白く痩たる掌を合せ佛を



雪譜巻之下
文渓堂蔵

拝まれければ次第に薄くなりてつひに消えうせたり

○関山村の毛塚

かくて餌屋七兵衛かくれゐたる戸棚よりはひ出でさても怖しきものを見たる事かな此法師なればこそよくぞ剃刀をあて玉ひける亡者はおそろしかりき独りならんも気味わろし今夜はここに宿らん。いかにもせどり玉へ待し人の帰りしなればはや用なしこれ見玉へ後の証にせんやとてこぼれたりし髪の毛をすこしのこしおきたり幽霊も心ありてのこしつらんとてみせければ七兵衛もさしのぞきて手にもとらず法師は紙につつみて仏壇におき夕間にのこし玉ひし酒ものこりあり肴はなくとものみ玉へとていまだのみのこりしとて二人ながら炉のそばに胡坐かきて酒のみながら七兵衛がいふやう幽霊といふものの話にはききつれどもはじめて見たり袖振合ふも他生の縁とこそいふなれいづれにて見えさせ玉ひしも本意なし今夜こそ仏法のありがたさも身にしみつれば出家は世にありにて百万遍をなしてお菊が仏果のいとなみにせん源教をばよびて功徳なさん古志郡のお菊がいうれいを見とどけたりと人々にかたり玉へ愚僧もかかる事を証人として幽霊をたすけて教化のよすがにせんとぞ思ふ昔もかかることありしと砂石集にみえしことなど人にきかせることをおほくかたりけるにおぼえず一ツ二ツかたりきかせなどして夜もふけければ一ツの夜具をふたりしてかづきうちふしけり

○さてあけの日七兵衛源教を伴ひて家に帰り四隣の人をあつめてお菊が幽霊の事をかたりければ源教懐よりかの髪の毛をとりいだして見せければ人々奇異のおもひをなしぬさて七兵衛百万遍の事をいひ出しにあつまりし者どもそれこそよき善行なれとおのおの催し玉へ茶の子はこなたよりもちよらん御坊は茶の用意をし玉へ数珠は庵にはなけれどもおてらのを借りてもちよらん猶人々をもさそひあはせくれんといふ七兵衛が妻もこれにかかはりしが夫にむかひてそのことに餅をつきてまゐらせむいづれもよろこびとて儀にそのまま

わしをなしけり○かくてその夜源教が草庵に人々あつまりかたりあひて
念佛しけるをりからくにぎやかしき佛となりけり此事をかしこに傳へ聞えて
話柄としけるがこゝろざしあるものはかりあひて源教がもとにいたりかの髪の毛を瘞め
石塔を建て供養せばお菊が幽魂黄泉地のかげにもよろこびなんといひ出し
にかなし心の人あまたありてそのよしをのひ終に石塔を建んとせる時にいた
りて源教はかゝる事の導師たらんは我がおよぶ所にあらずと是最上山関興
寺の上人を招請あまたりしよ人々きこえばとてかしこにいたりて事のよしをつげ
てお菊が戒名をもらひお菊が溺死したる橋の傍に髪の毛を埋め石塔を建る事
をのべて人を葬るが如くしてみなあつまりて懇ごろに佛事を営ましむかの紺
屋七兵衛は此事より發心して后に出家しけるとぞこれひとへにむかしまへのなすとけ
関山の毛塚とて今に残れり

○雪中に鹿を追ふ

他国の人越後はおしなべて大雪の国とおもふめれどさにあらずまへにもいへる如く海
濱に近き所は雪浅し雪ふかきは奥沼頸城古志の三郡或は刈羽三嶋の二郡に所
より深浅あり蒲原は大郡ゆゑ雪薄き所あれども東南は奥羽に隣りて高嶺つらな
るゆゑ地勢によりては雪深き所あり雪深き所は雪中牛馬を駆ふことならざる
されば人は雪に便利のよきものを用ふれども牛馬ゆへはこれをやどしおく事あた
はずのり雪中にては是を追ば首のあたりまで雪にうづまりんさまなればつらき事なら
ざるゆゑおよそ十月より歳を越えて四月のはじめまではむなしくやしなひおく
のことゝなりし暖国にはなき難儀の一ツとさる獣はまへにもいへるごとく初雪をまちて
山つたひに雪浅き国へ去るなれども行后れて雪にうづむものもあまたあるをこれを狩る
事あり熊の事は上巻にいへり野猪は猛きものなれば雪中にても得がたしと鹿羚羊などは
弱きものなれば雪中には得やすし鹿はことさら高脛なるものなれば雪にそしるゝ人より
いとたやすし鹿は深山をこのまずおのづから端山に居るものゆゑおのづから物に慣

しれバその妙あり山猟に慣たる者ハ雪の足跡を見てその獣をしりまたこれハ今朝のあしあとこれハ今ゆきしあとゝてその時をもしると三国嶺より北へつゞく二居の人（たふげある）の鹿おひするをきゝしにいざ鹿おひにゆかんとてかたらひあはせおの〳〵雪を漕ぐべき（ふかき雪をゆくを里にてこぐといふ）などに身をかため山刀をさし鉄炮手鎗又棒など持て山に入りかの足跡をたづねあとに随ひゆくぞ鹿を見つくるかれも人を見て逃んとすれども人のちかよるにおよぶぞ鹿ハ深田をゆくがごとく終にハ追ひつめらるゝところなりあるひハ剛勇の人などハ角をとりてねぢふせ山刀にて刺殺もありとぞこれらハ暖国にハあらざる事なるべし

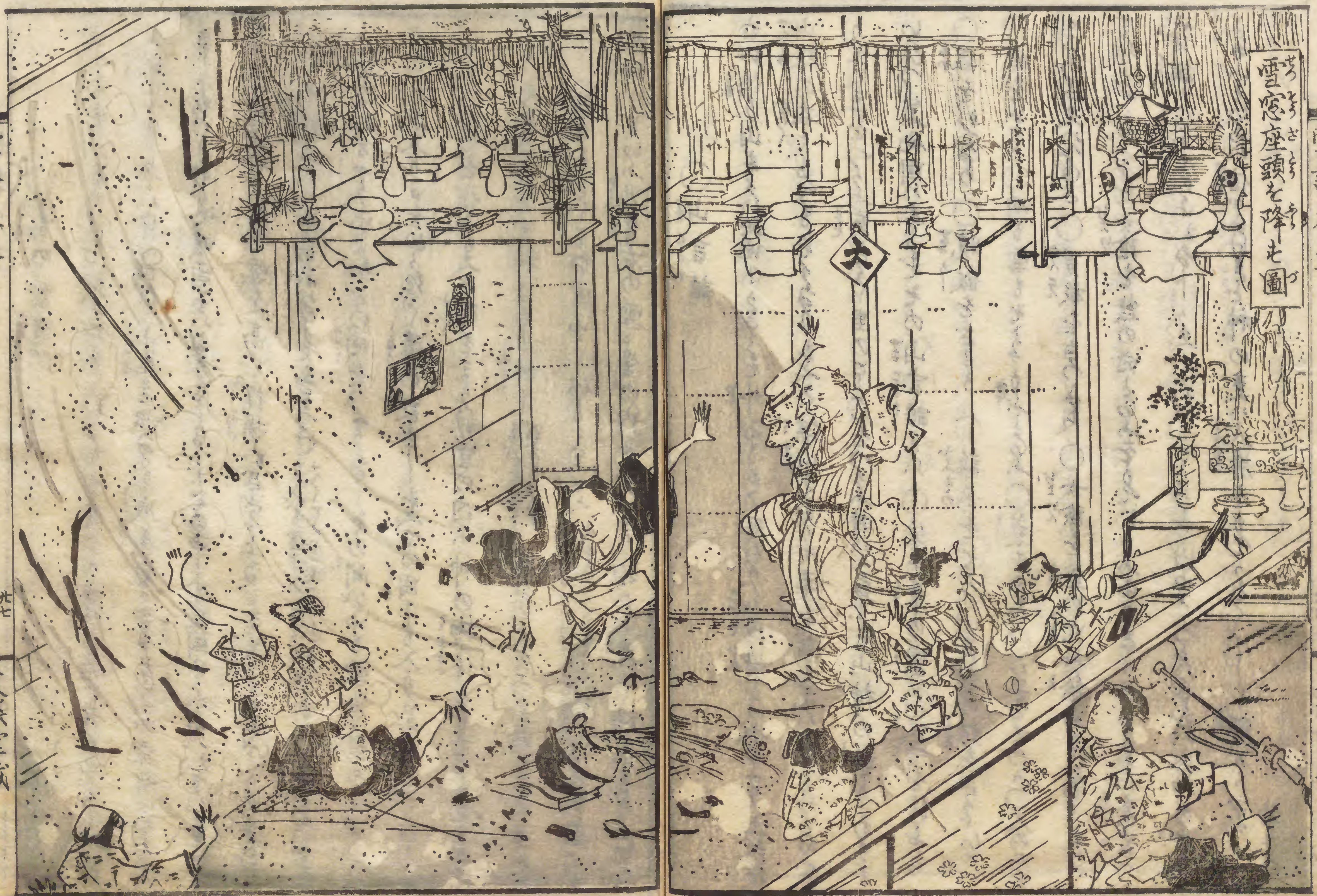
○泊り山の大猫

我が隣駅関に近き飯士山に続く東に阿弥陀峯とて樵する山あり（村々持分の）定あり二月にいたり雪の降止る頃農夫ら此山に樵せんとて語らひあはせ連日の食物を用意しかの山に入り所を見立て假に小屋を作りこれを寐所となし毎日こゝかしこの木を心のまゝに伐とりて薪につくり小屋のほとりにおほく積おき心に足るほどにいたれバそのまゝに積おきて家に皈る事を泊り山といふ（山にとまりゐて木をきるゆゑなるべし）さて夏秋にいたれバ積おきたる薪も乾たるゆゑ牛馬を駆ひて薪を家に運びて用にあつる也雪ふらざる所ハ雪中にハ山に入りて樵する事あたはざるゆゑの所為なり我国雪の為に苦心するの一ツ也右にいふあみだがみねにハ水なく谷川あれども山よりハ数丈の下をながる翼なければ汲ことあたはずこゝに年歴たる藤蔓の大木にまとひたるが谷川へ垂下りたるあり泊り山して水汲ものハ樽を脊にくゝし負ひ此ふぢづるをたよりとして谷川へくだり水をくみてたるの口をつめて脊におひふたゝびふぢづるに縋りてのぼる雲機をのぼるがごとく山をするものこのふぢづるなけれバ水をくむことならずよしや縄を用ふとも此藤の強にハおよぶまじこのゆゑに泊り山するものら此蔓を宝のごとく尊ぶとぞひとゝせ泊り山したるもの、かたりしハことし二月とまり山し時連のもの七人ちうしにありて

木を伐りて居たりしに山々に響くほどの大声して猫の鳴しゆゑ人々おそれ
おのきたる小屋にあつまり手に〳〵斧をとり耳をすましてきけバその声
ちかくにありときけバ又遠くに鳴とおもひしときけバちかし　あまたの猫かとおも
へバ其声ハ正しく一ツの猫なれどもすがたハさらにみせず鳴やみてのち七人の
ものおそろしくちかく鳴たる所にいたりてみれバ凍たる雪に踏入たる猫の足跡
あり大さつねの丸盆ほどありしとかたりき天地の造物かゝるもののありしともいふ
べからず我が友信州の人のかたりしハ同じ所の人千曲川へ夏の夜釣に行しに人の
三人もをるべきほどの大きなる岩水より半いでゝありよき釣場なりとてその上に
のぼりてつりをなしてねむたかりしにしばらくありてその岩に手鞠ほどに光るもの
二ツ双びいできたりこハいかにとおもふうちに月の雲間をいでゝよく見れバ
岩とおもひしハおほいなる蝦蟇にぞありける光りしものハ目なりけり此人いきたる心
地もなく何もうちすてゝ逃かへりしとかたりぬ

○山言語

右の泊り山するハ此地にかぎらず外にもする所あり小出嶋といふあたり上越後
山根の在々にてもするなりすべて深山にありて事をなすにハ山ことばとて常とか
りてことばをつかふ忘れて里のことばをつかふ時ハかならず山神の祟りありと
いひつたふ他国ハしらずその山言語といふハ○米を草の実○味噌を法ぶら
○塩をかへなみ○焼飯をざわう○雑水をぞろ○天気の好をようばし
○風をそよ○雨も雪もそよがふるといふ○蓑をやち○笠をてつか○人の死を
まがつたといふ又ハへねたと○男根をさつへいち○女陰を熊の穴此餘あまたありきこの
ことハそれしらず女陰を熊の穴といふをきゝておもふにこれらのことばハ商家の
符調といふものにおなじかるべしかゝることばを山ゆきにつかはざれバ山神の祟り
ありといふハ信じがたけれど神の事ハ人慮をもてはかりがたし論ずべからざる
物をや


雪窓座頭を降む圖

○童の雪遊び

我があたりハ前にもいへるごとくおよそ十月より翌年の三月まで八歳を越て半年ハ雪之中なれバ雪中に生れ雪中に成長するゆゑ童の雪遊ひをなせる事さまぐ\ありて暖国にハなき事多しその中に暖国の人にハ思ひもよらざるあそびありまづ雪を高く掘揚おきたる上などを童ども打よりて手あそびの木鋤にて平らかにならしてかためつけ〔童ども雪中にハこすきをもつ是雪国のつねなり〕さて雪をあつめて土塀を作るやうによきほどの囲をつくりなしその間ひにも雪にて壁めく所を拵くりこゝに入り口をひらき隣の家とし又すべての囲にも入り口をひらく此内に宮めく所を作り上へに階をまうけ宮の内に神の御体ともなるやうに拵くりなしこれを天神さまと称し〔あそびを大にし子どもつる〕筵など敷つめ物を煮べき所をも作るなべてとる雪にて作りたるこれ〔雪をくりぬきてこれを火をたくにきゆる事なし〕これを雪ン堂又城ともいふ児曹右の雪ン堂の内にあつまり物など煮て神にもさゝげ又みよりてうちくらふ又間にへいを作りたるハとなりの家に准へさまぐ\の事をなしてたのしみ遊ぶあそび俗に斯作りたるを打こぼつをもあそびとし又他の童のたまにちかくハおなじく作りたるを城をかまへなどいひてうちくるふもありそのまゝにかくもありおのれ牧之も童のころハかゝるあそびの大将をもせしがむなしく犬馬の齢を歴て今ハ夢のやうになりぬ

○雪に坐頭を降す

まへにもいへるごとく雪のうちに春をむかふるゆゑ歳越の日などハいづれの家にてもことさらに雪を掘て窓のあかりをとり出入する雪も年越の事あげきにまぎれて取除をなさゞる掘揚の屋上よりたかき雪道歩行にまよひあしき所もありひとゝせ歳越の夜余が点をもとむる俳諧の巻を懐にし俳友兎角子を伴ひその巻の催主のもとへいたりて巻を主に遣しけれバよろこびて今夜ハめでたき夜なりゆるく語り玉へとて主人の妻娵娘も打まじり

てなてなしけりさてさまざまの雑談のなかにあるじのつま牧之に歳こしの
夜ハ鬼の來るとて江戸にて厄拂ひといふものありて鬼を追ふるをおもしろく
いひて物もひもときしがむかしもさる事ありしや鬼の來るといふ空言
もきゝつたへにやと問ふ余こたへてそハあるじが持玉ふ年浪草に吾山があらはし
しハ志るせりかの書を見玉へといひしに鬼角子ハ酒にも酔ぬれバ戯言ていふ
やう鬼のくるといふ事いづれそらごとなからん女などのあつまりたる所ハ鬼の好
む所也鬼のくれバこそことしの豆まきを鬼やらひといふなれ俳諧の季よ
せにも見えたりといふ母のかたハらにねたる十三になる娘がいひけるハその鬼を
見し事ありしや。見たりとも鬼にもさまざまあり青鬼赤鬼ハ常のこと
白の白くてやさしきを白鬼といひ黒くて肥太りたるを黒鬼といふあのま江戸
に在し時厄拂が鬼をひつらえて西の海へさらりと投るを見し事ありその
鬼ハ黒かりし江戸の歳越に夜ハ鬼のありくなればそこらのとしこしにハ

鬼ハいくたりもありくべしあかり窓よりのぞきもやせんとたはむれにおどせバ
よめもむすめも空言の事にはあらぬといへど母の左右によりつきておそろしく
さむそうにみえけりかゝるをりしも人々の座りゐたる后の方にちかき窓ありし
がさびしき音ありてまどをやぶり揺あげの雪ぐわらぐわらと崩れおちたる中に人
の降り入りけれバ女ハきやと叫といひてうつぶして愕然迷ひ男ハたち立あが
りておどろきけり下部らもこのおとにおどろきはせよりて崩れおちたる雪にうもれ
たる人を見れバ此家へも常にきたる福一といふ按摩とりの小座頭なりけり幸ひに
疵もうけざりしかバ抚まハし腰をさするこそ福一なりとてなきさけべバ、そのまゝも
つれて下部らハおちたる雪をとりのけ窓をもとのごとくにつくろひなどもあるじの妻
もとくへいらにいふに福一鬼角どの鬼のまねしたるくるまにて鬼かとおもひて
皆きもを冷ひやせりめでたきとしの夜に盲が窓よりおちてことしハいまハしきる
ありとくしいでかけとてまゐりにまゐりけれバあるじさまさまりあひぞ福一

文溪堂蔵

いかにして窓よりおちいりしぞとゝがめし所、なまゑひの福一うちゑみていふやう
ばいかで今夜(こよひ)のおめでたさを申さんとてこそいでたちしに、さきに降つる雪ぶ
や掘(ほり)あげの道きのふとハちがひてあしもとあしく、はしきへたればおもはず転(こけ)
けるが窓(まど)をふみはづしておち入りしにこそ、ねがハくハいそぎかへし玉へと
いふ。嫗も娘も口をそろへ鬼にやとていたくおびえて、わりなく憎(にく)さも目(めう)と腹立(はらだち)く
いふ。あるじのつまいかりをなだめ、そもそもこよひの吉方(ゑはう)にあたる窓(まど)をやぶり目
のあるものゝ入りしハ、めでたきことゝおもひく、あるじのあしけれバ
鬼角(とかく)なりより福一まづかへりぬ、又こよいそのうらふるびしておくつしといへ
福一かしらを垂れものを按(あん)ずるさまなりしが、やがて鬼角(とかく)にむかひ哥一首(うたひとつ)よみて
いひきて玉はせといふ。此福一ハとしころけはど俳諧(はいかい)もざれ哥をもよむものなる
なれバ、あるじこそハおもしろしとて鬼角(とかく)がかきつるをよみきかせけれバ、そのうたに
吉方(ゑはう)から福一といふこめくら(米倉)が入りてあるじもち(餅)つくハめでたし

このうたにて人々めでたしとてあるじも手をうち(拍)ていさゝかよろこびふたゝび
盃(さかづき)をめぐらしけり。あるじもめんつきの羽織(はおり)を娶(よめ)にとりいださせて哥(うた)のろく
とて福一にとらせければ、膝(ひざ)にのせてなでさすり、あしまちの高名(かうみやう)したりとて
わらけさよろこびつゝ、めでたく歳越(としこし)にきせそめせんとて羽(は)おりきてかへりて
さぶりたちをつくりて猶よろこびけり。これが吉瑞(きちずゐ)と成(なり)けん、此年此家の娶(よめ)初産(うひざん)
に男子(なんし)をまうけ、やまひもなくておひたち、三ツのとし疱瘡(はうさう)もかろくして今年七
つになりぬ。福一ハかの伶俐(りこう)ものなりし由、今江戸にありて官(くわん)にもすゝみしと聞
此めでたき事どもありけり

北越雪譜初編巻之下終　全三巻　大尾

画者　京水百鶴（少年）

百鶴（印）　京山季子（印）
内閣文庫（印）　補印　（蔵書印）

和漢印章考　五巻　同編
本朝古印の摸本を圖し其制度の用格を弁ぜ其考へ漢印に渉るを以て和漢と目をすべて朱象賢が印典の作格に倣ひて記り

食物沿革考　同編
昔の食物と今の食物と變格在る事を弁じ食器の古圖をのせ考を記せり

芭蕉翁年譜　同編
一名ばせを年代記　翁一代の始終を記せり

高尾考　同編
妓女高尾十一代の傳を記し遺墨遺墨をうつしのせり

茶湯初心抄　同編
茶道を学ばざる人此書をもて茶席につらなりても耻をとらざるべし

俳諧早引草　著作堂主人著
四季の詞ハさらなりすべて俳諧に用ゆべきものハもらさずさらべ註釋し見るに見やすく引に速かるを宗として席上の重宝おもふまゝなるの形し

東都著作堂主人著
玄同放言 第一集三冊 第二集三冊 出來
天地之部 植物之部 人事之部 亦人事之下より器用之部に至るこの篇ハことさらに珍説奇談を雑識し且縮字を多く載せて閲するものにあらざるものあるを上集に比すれバ俗の耳ちかきるも多り
同 第三集 三冊 近刻
器用之部より動物之部に至る古器異獣奇鳥等の圖説多く此集中に有異聞珍説多し閲するものはなはだしく佳境に入らん就中佛法僧鳥の寫生ハ古人の摹本を多くあつめて異同あるを著し此他北越の雪むし異魚海獣の画圖まで寫生を旨とし世に罕なる物種々載たり
同 第四集 三冊 近刻
此集全部十二巻に至りて始めて全くなし遠からず全書となるべきものなり
天保七丙申年九月發兌
書肆
大坂心齋橋筋博勞町
河内屋茂兵衛
江戸大傳馬町二丁目東側
丁子屋平兵衛壽梓

国立公文書館
National Archives of Japan